

山口県立萩美術館・浦上記念館

H A G I |

HAGI URAGAMI MUSEUM MAGAZINE

萩

120

SUMMER ISSUE
2026



重要文化財 脚付子持壺形須恵器
古墳/飛鳥時代(7世紀) 鳥取県倉吉市上野遺跡出土
国(文化庁保管) 撮影:山崎信一
【展示:8月11日-9月23日】

HAGI URAGAMI MUSEUM



This is SUEKI—古代のカタチ、無限大!

須恵器のカタチが教えてくれる古代人の営み

約1,600年前の古墳時代中期、日本では「須恵器」と呼ばれるやきものが作られ始め、その後およそ500年にわたって使われ続けました。灰色で硬く焼き締まった須恵器は、橙色でやわらかい質感の縄文土器や弥生土器とは異なる新しいやきものでした。これは、同じ頃に朝鮮半島で作られていた「陶質土器」の製陶技術が日本へ伝わったことで誕生しました。整った形の器を効率よく作る「ロクロ」や、1,100度を超える高温を出すことができる「窖窯(あながま)」、この二つの新しい技術が伝わったことで生産が始まりました。

今夏、当館で開催する特別展「This is SUEKI- 古代のカタチ、無限大!」展では、こういった須恵器のことを知る楽しさや、古代のロマンに触れていただきたいと準備してきた展覧会です。本展はその多彩な形〈カタチ〉に注目して、「Episode1 海を渡った技術と文化」「Episode2 造形のうつりかわり」「Episode3 ハレのうつわ—古墳時代の祭り—」の3つのテーマで構成し、古代の人々と須恵器の関わり〈エピソード〉を紹介するものです。本稿では、その内容を一部紹介したいと思います。

Episode1 海を渡った技術と文化

須恵器誕生の背景には、海を通じた人々の交流がありました。初期の須恵器は、朝鮮半島から海を渡ってやって来た人々が暮らした村や、彼らが埋葬された墓と考えられる所から出土する事例があります。たとえば、兵庫県姫路市の宮山古墳では、朝鮮半島産の陶質土器とよく似た形の須恵器が出土しています(写真1)。かつて朝鮮半島南部で「加耶」と呼ばれた地域のもと考えられている「有蓋台付双耳鉢」(写真2)は、鉢状の杯部と、その両側につく把手、ラップ状に開く脚部など、宮山古墳の無蓋高杯と多くの共通点があります。宮山古墳は、5世紀前半に築かれた直径約30m、高さ約2mの大型円墳です。墳丘からは3基の埋葬施設(竪穴式石室)が確認されており、この須恵器は最も古い石室に垂飾付耳飾、銀製指輪、画文帯神獸鏡、甲冑、鉄鎌、馬具など、他の豊富な副葬品とともに納められていました。さらに注目されるのは、この時期の日本では、石室内に土器を副葬する風習がほとんど見られず、朝鮮半島の墳墓ではそのような例が多く知られていますので、このことから、宮山古墳は渡来人、あるいは渡来人と深い関わりをもつ人物の墓であると考えられます。

このエピソードは、須恵器は単に「モノ」として日本にもたらされたのではなく、朝鮮半島の技術、葬送儀礼や文化、社会制度といった人々の営みとともに伝わってきたことを教えてくれます。

須恵器



陶質土器



1 重要文化財 無蓋高杯 古墳時代(5世紀前半) 兵庫県姫路市宮山古墳出土
姫路市教育委員会 [展示期間: 8月11日~9月23日]

2 [陶質土器]有蓋台付双耳鉢 三国時代(5世紀後葉~6世紀初頭)
韓国・加耶 東京富士美術館

Episode2 造形のうつりかわり

須恵器の新技术である「ロクロ」の導入は、整った形の器を効率よく作ることを可能にし、規格的な器が生産されるようになりました。そのため、人々の生活様式や価値観の変化は、器の形にも敏感に表れるようになります。たとえば、6世紀に伝来した仏教文化は、関連什器として金属製の器をもたらしました。須恵器は7世紀になるとそのデザインを取り入れた器が作られるようになり(写真4)、古墳時代の器(写真3)から様変わりします。



3 蓋杯 古墳時代(6世紀) 牛頭窯
福岡県大野城市牛頭本堂遺跡群出土 大野城市



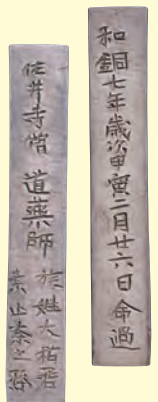
4 蓋杯 古墳/飛鳥時代(7世紀) 牛頭窯
福岡県大野城市牛頭月ノ浦1号窯跡出土 大野城市

また、8世紀になると火葬の広まりとともに葬法が変化し、遺骨を納める骨壺が須恵器で作られるようになりました。そのなかには、「蓋付双耳壺」(写真5)のようにどういった人物が葬られたかを示す墓誌(写真6)を伴うこともありました。この表には、「佐井寺僧□道薬師□族姓大柁君/素止奈之孫」(佐井寺の僧・道薬師、大柁君、素止奈の孫)、裏には、「和銅七年歳次甲寅二月廿六日命過」(和銅7年(714)2月26日に亡くなった)の文字が刻まれており、これがおおよそいつ頃に作られたものかを知る手掛かりにもなっています。こういった好例の助けもあり、6世紀から8世紀にかけて、須恵器は、仏教文化を受け入れ、次第にその形を変えていった様子が見えます。



5

5・6 重要文化財 有蓋双耳壺および銀製墓誌
奈良時代(8世紀前半)/墓誌 和銅7(714)年
奈良県天理市佐井寺僧道薬師墓出土
奈良国立博物館
[展示期間: 7月3日~8月9日]
画像提供: 奈良国立博物館



6



7 重要文化財 七連杯付裝飾器台
古墳/飛鳥時代(6世紀後半)
鳥取県倉吉市野口1号墳出土
倉吉市立倉吉博物館 画像提供: 倉吉博物館
[展示期間: 8月11日~9月23日]

Episode3 ハレのうつわ - 古墳時代の祭り -

須恵器のなかには、「裝飾須恵器」あるいは「特殊須恵器」と呼ばれる、豊かな装飾をもつものがあります。これらは主に古墳時代後期から飛鳥時代にかけて作られ、墳墓での儀礼や祭祀に用いられました。たとえば、器台の上に同じ形の器(子器)をいくつも取り付けた「子持須恵器」(写真7)、人物や動物の小像を付けた「小像付須恵器」(写真8)、さらに鳥や亀などの動物をかたどった器(写真9)、船を表現した「形象須恵器」(写真10)と、様々な形が作られ、多様で独創的な造形を展開しました。



8 裝飾付台壺 古墳時代(6世紀)
岡山県瀬戸内市瀬波戸池古墳出土
岡山県立博物館



9 広島県指定重要文化財 亀形須恵器
古墳/飛鳥時代(7世紀前半)
広島県安芸高田市一ツ町古墳出土 個人蔵



10 船形高杯 古墳時代(5世紀中葉)
陶邑窯 千葉県市原市草刈3号墳出土
千葉県教育委員会
※本作品は、Episode1に出品

こうした装飾性の高い形は、なぜ作られたのでしょうか。実は、これには、墳墓に葬られた人物(被葬者)の死後世界に対する、人々の願いや祈りがありました。たとえば、5世紀に作られた「環台五連壺」(写真11)のような子持須恵器は、中国・後漢時代(1~3世紀)の「五管瓶」(写真12)に類似しています。五管瓶は、被葬者が死後の世界でも豊かな暮らしができるよう穀倉を表したもの、または被葬者の魂が安らかに宿るためのものと考えられています。これと同様に小壺をいくつも付けた環台五連壺も、墳墓から出土したもので、葬送儀礼の道具として作られたことが考えられ、五管瓶と同様の意味を持っていた可能性が考えられます。形の共通性をそのようにとらえると、装飾須恵器・特殊須恵器は、単なる器物ではなく、人々の心の動きが生み出した形ととらえることができるのです。

以上、須恵器にまつわるエピソードを紹介しましたが、一見、灰色で無機質な須恵器も、その背景を知ることで、当時の人々の慣習や、それをもたらした朝鮮や中国といった東アジアの国々との交流が垣間見え、生き生きとしたものに見えてくるようです。本展では、様々な須恵器の形を通して、人々の交流の様子や当時の文化について紹介します。ぜひ会場で作品をご覧ください、その造形の魅力をご堪能ください。

(当館学芸員 市来真澄)



11 環台五連壺 古墳時代(5世紀)
島根県松江市金崎1号墳出土
京都大学総合博物館



12 灰釉五管瓶 後漢時代(1~3世紀)
山口県立萩美術館・浦上記念館

This is SUEKI

須恵器

開館30周年記念

2026 7.3 fri → 9.23 wed

前期: 7.3 fri → 8.9 sun / 後期: 8.11 tue → 9.23 wed

※8月10日に一部展示替えを行います。

休館日 7月13日(月)、21日(火)、27日(月)、8月10日(月)、
17日(月)、24日(月)、31日(月)、9月14日(月)

開館時間 9:00~17:00(入場は16:30まで)

観覧料 一般 1,300(1,100)円 学生・70歳以上 1,100(900)円 18歳以下無料

・開催中のコレクション展示もご覧いただけます。

・()内は前売りおよび20名以上の団体料金。

・高等学校、中等教育学校、特別支援学校の生徒は無料。

・障害者手帳等をご持参の方とその介護者(1名)は無料。

・前売券は、ローソンチケット(Lコード61913)、

セブンチケット(セブンコード115-258)でお求めになれます。



— 古代のカタチ、無限大! —
Ancient Vessels, Timeless Forms

主催 SUEKI展実行委員会(山口県立萩美術館・浦上記念館、朝日新聞社、yab山口朝日放送)

後援 山口県教育委員会、萩市、萩市教育委員会

特別協力 エフエム山口

助成 美術館連絡協議会

重要文化財 装飾子持壺付装飾器台

古墳/飛鳥時代(6世紀後半) 鳥取県倉吉市野口1号墳出土

倉吉市立倉吉博物館 画像提供: 倉吉博物館 [展示: 7月3日~8月9日]

古代中国のやきもの

【会期】2026年5月26日(火)―10月12日(月・祝)

中国のやきものの歴史は長く、先史時代から現代に至るまでに多くの陶磁器を生み出してきました。とりわけ、明器と呼ばれる墓に副葬された非実用のやきものには、被葬者が死後の世界でも豊かで安らかな暮らしができるように、穀物倉や墓を守る神王を模したものと、さまざまな形が作られました。

本展では、漢時代(紀元前202-220)から唐時代(618-907)までの明器24点を展示し、こうした死後世界を思い描く発想とそれが作り出す形について紹介します。また、南朝時代(420-589)の青磁や唐時代の三彩など、当時、最先端の技術でこれらが作られている点も見どころです。中国古代の精神文化が残した儀礼や祈りの造形美をご堪能ください。

せいじしんていこ 青磁神亭壺

三国時代～西晋時代(3世紀) 中国・越州窯

装飾の題材が豊富で、造形性の高い壺は、この頃、副葬品として長江中・下流域で流行したものです。肩部を境界とし、上下で異なる世界が表現されています。上部には魂の宿る楼閣や無数の飛鳥、神獸、人物(奏者)が、下部には蟹、亀など、水辺の生き物や奏者が貼花により飾られています。古代中国の人々は死後の靈魂の存在を信じ、その長生不死といった思想は「神亭壺」または「魂瓶」といった特殊な造形の器を生み出しました。



かいたう かさいしんのう あ うん 灰陶加彩神王(阿・吽)

唐時代(8世紀) 中国

邪鬼を踏みつけ勇ましい様子の神将を模しています。このように人物をかたどったものを「俑」と言い、その歴史のはじまりは紀元前にまで遡ります。とくに唐時代のものは単なる模型としてではなく、精緻なつくりで躍動感のある表現が特徴と言えます。憤怒の形相をした神将は、被葬者の死後を邪気から守るために貴族の墓の入口に配置されたものと考えられています。



七搦綾乃 rainbows

茶室

2026年4月3日[金] — 2027年3月28日[日]



edge



中央:〈mantle I〉2026年／h52×w137×d57(cm)／樟、雲母、アクリル絵の具、木炭
右:〈mantle II〉2026年／h137×w45×d7(cm)／樟、雲母、アクリル絵の具、木炭

撮影:マキタオモリツグ

感応する人と自然

^{ななからげあやの}七搦綾乃は鹿児島県出身の木彫作家である。広大な茶畑の広がる自然豊かな土地で育った彼女は正統な木彫技法を学びながらも、これまで独自の世界観を宿した作品を生み出してきた。^{ひから}干乾びた植物や小動物の骨、石や山、虹や霧などをモチーフとし、生と死の間に見え隠れする生命の気配、人間の感覚を超えた自然の時間などを表現する。《rainbows edge》という作品シリーズの名も「虹の端っこ」、つまりそこにあるはずなのに辿り着けないという自然現象の不思議さを美しいと感じたことに由来するという。

例えば、水分が抜けて異様にねじ曲がり、もはやもとは何であったかもわからなくなった大根をモチーフにした木彫作品がある。彼女によればこの大根はなお生きており、虹のような生命の輝きを放っているのだという。また、何本もの干乾びたバナナの茎に布を被せたイメージをクスノキであらわした作品は、誰も見たことがない異形の生き物のようであり、一部が布^{おお}に覆われているがゆえに見る者に不穏な印象を与える。

思うに彼女が作り出すこうした生命体？は、現実の明るい太陽の光のもとでは目に見えず、おそらく洞窟のような暗闇の中でおぼろげに存在を感知できる性質のものだろう。それは生物が死に近づいた時にはじめて輪郭をあらわす生命の形であり、慌ただしい現代の日常生活に追われ、鈍くなった我々の感覚では捉えにくいものだ。

こうした見えざる存在に対する鋭敏な感性は、どうやら七搦自身の素質と生まれ育った環境の賜物であ

るようだ。子ども時代に見てはいけないものを見たいという好奇心に駆られてお守り袋の中身を開けてしまったという逸話や、猟をしていた祖父の家を訪れた際、軒先に吊るされた鹿の脚(山の神に対する狩猟儀礼の一種と思われる)が非常に恐ろしかったという体験談からもその一端が窺える。また、作品制作に用いるクスノキも鹿児島島の自然と深く結びついた樹木であり、それはしばしば巨木になるがゆえに^{しんぼく}神木として扱われ、仏像の素材として古くから用いられてきたこととも無関係ではないだろう。

古来、日本人は自然の中にある畏怖すべき存在を「カミ」と呼んで敬ってきた。彼女にはそうした気配のようなものを肌で感じ取り可視化する能力が備わっているのかもしれない。もしそうであれば作品を作る行為は物質に魂を込める呪術に限りなく近い。

今回、七搦が制作した《mantle I》と《mantle II》は、これまでの《rainbows edge》シリーズと同様いずれもクスノキを用いたオブジェだが、コンセプトとしてはやや違った方向性をもつ作品として仕上がった。四畳半の茶室の中央に置かれた《mantle I》は巍^ぎ然^{ぜん}として聳^{そび}え立つ山岳のような姿で、キラキラと輝^{うん}く雲母^もが磨りこまれた二つのピークの間には深く挟^{えぐ}られた谷が形成され、何億年にも及ぶ浸食作用の時間を思わせる。また、茶室全体の視点で見ればそれ自体が巨大な^{ぼんせき}盆石のようでもあり、部屋中に満ちるクスノキ特有の爽やかな芳香に気づかなければ、それが木

七搦綾乃 rainbows edge に寄せて

彫作品であるとはわからないだろう。

制作の手順としては、まず自分の娘に布を被せておおまかな形を決め、そのドローイングをもとにチェーンソーと斧を使って彫刻していく。斧を使うのは彫刻刀のように思ったおりに彫れないところを大切にしたいからだという。人と自然のイメージを交錯させ、不確実性や偶然性を取り入れる点は、自然と交感する七搦らしい制作スタイルだ。

いっぽう、床の間に立てかけるように設置された《mantle II》は、壁にかけた蓑みのと笠かさのように見える細長いオブジェで、上部には放射状の線が刻まれ、そこから下に向かってはさらに獣毛のように毛羽立つ細かい線刻が無数に施されている。それは滝のように上から下に向かう流動的なイメージを喚起させる造形であり、これを水と見立てればその流れる先には《mantle I》があり、四畳半の茶室はたちまち山水画の世界に変貌する。

茶室は桃山時代に千利休によって完成された侘数寄わびすきの理念によって、それまで主流であった書院の茶室から草庵の茶室へと大きな進化を遂げた。都市の喧騒の中にありながら「市中の山居」と称されるような隠逸なる別世界として機能する空間——それは枯れたものの中に宿る美しさを知り、茶室を深山幽谷に見立てた七搦の作品世界とも深く重なる。

ところで、七搦によれば《mantle》という作品名は肩にかけるマントのことで語源的には覆うというような意味があり、それは同時に地球内部にあって核を覆

うマントルをも意味するらしい。すなわち、布で覆うという制作プロセスを経て作られた《mantle I》は地球の活動の結果生まれた山岳なのであり、蓑のような形をした《mantle II》もマントの日本的な翻案と解せば、それは人が身に着けるという意味において人間を象徴したものとなる。そこには人が自然の一部であるというもうひとつの世界観が隠されているのだ。

「知者は水を楽しみ、仁者は山を楽しむ。知者は動き、仁者は静かなり、知者は楽しみ、仁者は寿し」(『論語』雍也第六)。今回の展示《rainbows edge》を見たとき、このような孔子の言葉を思い出した。知に優れた者は流れる水のように自在に人生を楽しみ、仁徳のある者は山の如く泰然として長寿を保つというような意味である。そこには倫理的な意味を超えて、人間存在を大自然に重ねるといふ東洋的世界観を見て取ることができるが、もちろん表現者である七搦は最初からそのような固定的な意図をもって作品を制作したわけではないだろう。ただ、彼女は今回の展示作業の帰路、山口県の名勝「長門峡」を訪れ、そこで《mantle I》とそっくりの岩と出会い、奇しくも制作の「答え合わせ」ができたという。人と自然が感応し、作品が山口の地とシンクロしたとすれば企画者としてこんなに嬉しいことはない。

末吉武史(当館学芸専門監)

コレクション展（浮世絵）

展示室1（本館1F）

明治の美人画 楊洲周延 II

【会期】2026年7月28日（火）— 8月23日（日）

楊洲周延は本名橋本直義という越後高田藩士で、戊辰戦争では旧幕府軍として参戦した経験を持ちます。慶応元年（1865）頃、豊原国周に入門し、明治期には浮世絵師として第一線で活躍し、特に美人画を数多く手がけました。

今回は江戸城大奥を描いた「千代田の大奥」、江戸から明治の風俗と美人画を取り合わせた「時代かがみ」、明治の新風俗を描く「真美人」など、代表的なシリーズを中心にご紹介します。



「真美人 女教師」明治31年（1898）

コレクション展（浮世絵）

展示室1（本館1F）

光線画の時代 小林清親

【会期】2026年8月25日（火）— 9月13日（日）

小林清親（1847～1915）は、明治9年（1876）に版元の松木平吉から、江戸情緒の名残が漂う東京を主題にする5点を発表します。これらは高度な木版技法を駆使して、光と影を繊細に表現することから「光線画」と称されました。その後、版元を福田熊次郎へとかえ、同14年（1881）まで93図を手がけ、後に「東京名所図」という一連のシリーズと見なされています。

今回は清親の「東京名所図」を中心にご紹介します。



「東京新大橋雨申図」明治9年（1876）

展示室8（陶芸館2F）

第10回現代ガラス展 in 山陽小野田 萩展

【会期】2026年9月1日（火）— 10月12日（月・祝）

休館日：9月14日（月）、24日（木）、28日（月）、10月5日（月）

時間：9:00～17:00（入場は16:30まで）

会場：山口県立萩美術館・浦上記念館 展示室8（陶芸館2F）
※入場には、山口県立萩美術館・浦上記念館 コレクション展観覧料（一般400円他）が必要です。

主催：現代ガラス展実行委員会、山陽小野田市



大賞 勝川夏樹《痕跡Ⅷ》

コレクション展(浮世絵)

開館30周年記念 特別企画

うたがわひろしげ

歌川広重 I・II・III

展示室1(本館1F)

I 富士三十六景

【会期】2026年9月15日(火)～10月12日(月・祝)

展示室1・2(本館1F)

II 東海道五十三次之内

【会期】2026年10月14日(水)～11月15日(日)

展示室1(本館1F)

III 江戸の名所風景

【会期】2026年11月17日(火)～12月20日(日)



「名所江戸百景 大はしあたけの夕立」 安政4年(1857)
展示:11月17日(火)～12月20日(日)

山口県立萩美術館・浦上記念館は、開館30周年を迎えました。それを記念して、館蔵する浮世絵版画の中から、葛飾北斎と並び称される巨匠、歌川広重の名所風景画を3回にわたる展示でご紹介します。

当館は、萩市出身の実業家・浦上敏朗氏(1926-2020)が蒐集した浮世絵版画と東洋陶磁のコレクションを山口県に寄贈されたことが契機となり、平成8年(1996)10月14日に開館しました。浦上氏の故郷への想いと美術館設立に対する情熱は、当館の原動力として現在も美術館のあらゆる活動に受け継がれています。収蔵品の核である「浮世絵」と「東洋陶磁」、そして萩焼を中心とした山口県に関連する「工芸」という3つの専門分野を活動のテーマとする点も、このような当館のルーツに基づく特色なのです。

当館の浮世絵コレクションは、浮世絵版画の歴史と近代版画への展開を通覧する充実した内容を誇ります。江戸時代、市民を中心に愛好された浮世絵版画は、19世紀の西欧で流行したジャポニスムにおいて高く評価され、その後の西洋美術に影響を及ぼしました。現在では日本を代表する芸術として、国内外で認められています。

広重の名所風景画は、季節や天候によって変化する自然の諸相と人々の営みが詩情と共に描かれ、多くの人々を魅了してやみません。北斎の大胆で個性的な表現に比べ、広重はより穏やかで落ち着いた作風が特徴です。

今回は、I期に広重が北斎を意識して描いた揃物『富士三十六景』、II期に、代表作である揃物『東海道五十三次之内』、III期に広重が生涯で最も多く手がけた江戸の名所風景画をご覧ください。

スタンプラリー

「グラントワ+萩美 北斎★広重コラボ」

浮世絵界の2大スター、北斎と広重の展覧会をめぐろう!

実施期間 2026年9月15日(火)～12月20日(日)

※当館でのスタンプカードの配布期間は11月8日(日)まで。

グラントワの島根県立石見美術館で開催される北斎展と、当館で開催される広重展を観覧し、両会場のスタンプを集めた方に北斎と広重のポストカードをセットでプレゼントします。

対象となる展覧会

【山口県立萩美術館・浦上記念館】

開館30周年記念 特別企画 歌川広重 I・II・III
※いずれか1つの展覧会。

【島根県立石見美術館】

石見版 企画展「永田コレクションの全貌公開〈二章〉
北斎一『葛飾北斎期』・『戴斗期』編」
会期9月19日(土)～11月9日(月)
※石見美術館でのスタンプ提供とプレゼントお渡しは、北斎展会期中のみ。

※詳細はホームページ等でお知らせします。

SCHEDULE 令和8年度(7月~10月)

■ 休館日 ★ イベント ● ギャラリー・ツアー ◆ ギャラリー・トーク

7 JUL	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31
展示室1	明治の美人画 楊州周延I (7/2~7/26)																										※1				
展示室2	古代中国のやきもの (~10/12)																														
展示室3~6	開館30周年記念 This is SUEKI - 古代のカタチ、無限大! (7/3~9/23)																														
展示室7	焼締陶一土と炎の造形美 (~10/12)																														
展示室8	山本晃一生命の輝き (~8/23)																														
特選鑑賞室	二代歌川広重「名所江戸百景 赤坂桐畑 雨中夕けい」(7/2~7/31)																														
茶室	七瀬綾乃 rainbows edge (~2027.3/28)																														
8 AUG	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31
展示室1	明治の美人画 楊州周延II (~8/23)																										※2				
展示室2	古代中国のやきもの (~10/12)																														
展示室3~6	開館30周年記念 This is SUEKI - 古代のカタチ、無限大! (~9/23)																														
展示室7	焼締陶一土と炎の造形美 (~10/12)																										展示替えのため休室 (8/24~8/31)				
展示室8	山本晃一生命の輝き (~8/23)																														
特選鑑賞室	歌川国芳「東都富士見三十六景 佃沖晴天の不二」(8/1~8/30)																														
茶室	七瀬綾乃 rainbows edge (~2027.3/28)																														
9 SEP	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	
展示室1	光線画の時代-小林清親 (~9/13)													歌川広重「富士三十六景」(9/15~10/12)																	
展示室2	古代中国のやきもの (~10/12)																														
展示室3~6	開館30周年記念 This is SUEKI - 古代のカタチ、無限大! (~9/23)																														
展示室7	焼締陶一土と炎の造形美 (~10/12)																														
展示室8	第10回現代ガラス展in山陽小野田 萩展 (9/1~10/12)																														
特選鑑賞室	歌川広重「木曾海道六拾九次之内 宮ノ越」(9/1~9/30)																														
茶室	七瀬綾乃 rainbows edge (~2027.3/28)																														
10 OCT	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31
展示室1	歌川広重「富士三十六景」(~10/12)													歌川広重「東海道五十三次之内」(10/14~11/15)																	
展示室2	古代中国のやきもの (~10/12)																														
展示室3~6																															
展示室7	焼締陶一土と炎の造形美 (~10/12)																														
展示室8	第10回現代ガラス展in山陽小野田 萩展 (~10/12)																														
特選鑑賞室	葛飾北斎「諸国名橋奇覧 すほうの国きんたいはし」(10/1~10/31)																														
茶室	七瀬綾乃 rainbows edge (~2027.3/28)																														

※1 明治の美人画 楊州周延II(7/28~8/23) ※2 光線画の時代-小林清親(8/25~9/13) ※3 萩焼New Age(10/31~12/20) ※4 開館30周年記念 現在形の陶芸 萩大賞展VII(10/31~12/20)

★ イベント

This is SUEKI 記念講演会
「窯の導入と渡来人」
[日時] 7月11日[土] 13:30~15:00
[講師] 長友朋子氏(立命館大学文学部教授)
[会場] 講座室(座席数84席)

This is SUEKI 記念講演会
「九州の須恵器と牛頭窯跡群」
[日時] 9月5日[土] 13:30~15:00
[講師] 石木秀啓氏
(福岡県大野城市地域創造部
心のふるさと館文化財担当課長)
[会場] 講座室(座席数84席)

アートフェスティバル2026
[日時] 8月9日[日] 9:00~16:00

開館記念日
[日時] 10月14日[水]

● ギャラリー・ツアー

(担当学芸員による特別展作品解説)
開館30周年記念 This is SUEKI
- 古代のカタチ、無限大!
[日時] 会期中の毎週日曜日
11:00~12:00
[会場] 本館2階展示室
※担当学芸員によるギャラリー・ツアー、ギャラリー・トークへの
ご参加には観覧券が必要です。
※イベント詳細については当館ホームページをご覧ください。

◆ ギャラリー・トーク

(担当学芸員による展示作品解説)
いずれも11:00~(30分程度)
◆ 7月11日[土] 明治の美人画 楊州周延I
◆ 7月25日[土] 古代中国のやきもの
◆ 8月 8日[土] 明治の美人画 楊州周延II
◆ 8月22日[土] 山本晃一生命の輝き
◆ 9月12日[土] 光線画の時代-小林清親
◆ 9月26日[土] 焼締陶一土と炎の造形美
◆ 10月10日[土] 歌川広重「富士三十六景」
◆ 10月24日[土] 歌川広重「東海道五十三次之内」

公式HP

臨時の休館や
イベントを中止・
変更する場合
があります。



詳しくは当館ホームページをご覧ください。
お問い合わせ
TEL 0838-24-2400
URL <https://hum-web.jp/>

表紙について
重要文化財 脚付子持壺須恵器 古墳/飛鳥時代(7世紀) 鳥取県倉吉市上野遺跡出土 国(文化庁保管) 撮影:山崎信一
本作品は、古墳時代後期から飛鳥時代の頃に作られた装飾須恵器です。これは、臺前祭祀に用いられ、かつ、島根県東部(出雲)を中心とした限られた地域で使われたことが、発掘調査によりわかっています。そのため「出雲型子持壺」とも呼ばれています。脚台の付いた親壺の肩に複数の子壺を配置した本作の類型と、もう一種類、脚台の付かない長胴形の親壺の肩に子壺を複数のせたものもあります。これが見つかった上野遺跡は墳墓ではありませんが、そこへ持ち込まれる前に生産場所から集められた集積所的な性格の遺跡と考えられています。

交通 アクセス

- 【新山口駅から】**
- 直行バス「スーパーはぎ号」(約60分)で 萩・明倫センター下車、徒歩約5分
 - 防長バス(約90分)で 萩バスセンター下車、徒歩約12分
- 【山口宇部空港から】[萩・石見空港から]**
- 萩近鉄タクシー(乗合タクシー) 約70~80分(利用前日までに要予約)
- 【JR山陰本線】**
- JR 萩駅からタクシー約7分
 - JR 東萩駅から萩循環まあるバス(西回り)約20分
 - JR 玉江駅から徒歩約20分
- 【自動車】**
- 「中国自動車道」美祿東JCT経由、「小郡萩道路」絵堂ICから約20分
 - 「山陰自動車道」三見ICから約10分、国道191号沿い



山口県立萩美術館・浦上記念館
HAGI URAGAMI MUSEUM

〒758-0074 山口県萩市平安古町586-1 TEL 0838-24-2400 FAX 0838-24-2401
URL <https://hum-web.jp/>
季刊「萩」 令和8年(2026)7月1日 通巻第120号 [発行] 山口県立萩美術館・浦上記念館 山口県萩市平安古町586-1



最新情報は公式SNSで